

日本体育学会  
体育哲学専門領域  
**会報**

Vol.17(4), February, 2014

記事

- ♪ 巻頭言
- ♪ 体育哲学考
- ♪ 私の研究
- ♪ 書籍紹介
- ♪ 運営委員会からのお知らせ
- ♪ 第3回定例研究会のお知らせ
- ♪ 次号予告

**巻頭言**

**身体運動：随意運動、不随意運動、そして随意運動不能**

**舛本 直文（首都大学東京）**

私たち人間の身体は精巧にできていて身体運動も精密な機序から成り立っていることは周知のことである。その分、身体は非常にもろく、壊れやすいものでもある。昨年、不慮のアクシデント（原因不明の意識喪失によって倒れ、頸髄を損傷）によって実感的にそのことを体感したので、改めて私たちの身体運動というものについて振り返ってみたい。

私たちの身体運動は、一般的に随意運動 voluntary movement と不随意運動 involuntary movement に分けられる。随意運動とは、「自分の意志によって行われる運動。大脳皮質からの刺激によって随意筋が収縮し運動が起こされる」ことであり、大脳からの刺激が神経経路を介して随意筋を動かすことによって運動する。このように「意のままに」身体の各部位を動かすことができればスポーツでも鬼に金棒である。一方、不随意運動には「自分の意志によらず、不随意筋によって行われる運動。心筋の収縮、横隔膜や胃腸の伸縮、消化液の分泌などの内臓の運動や、反射による運動など」および「意志とは無関係に生じる不合理な動作・運動」があるとされる（以上、引用はデジタル大辞泉）。不随意運動の latter には、振戦や病氣、脳機能障害などによっても生じる運動が当てはまる。私たちの「意のままにならない」身体の運動の仕組みである。さらに、随意運動と不随意運動の中間的な運動もみられる。つまり、普段は不随意に運動しているが、私たちの意図によっても随意に運動させることができる運動である。その例として、瞬きや呼吸があげられる。普段は気にしなくても自動化された運動であるが、私たちは必要に応じて意識的に瞬きや呼吸ができる。姿勢制御の自動調整システムもこの部類に入る。スポーツにおけるスキルはこうはいかない。スポーツでは訓練によって、自動化したスキルが身につくという考えもあるかもしれないが、やはり瞬きや呼吸のようなメカニズムとは異なる。これらの知識は、昔、運動生理学で学んだ事項でもある。

さて、随意運動不能とは、自分の身体を自分の意志や意図のもとに動かそう（随意運動）としても、動かすことができない、あるいは動かないという事態のことである。「意のままに」動くということと真逆の事態である。これまでは随意に動かしたものが動かなくなる事態である。それを実感したときの驚愕は、体験したことのない人間には想像を絶するであろう。これは、スキル学習のように、最初は「意のままに」は動かないが、練習を重ねることによって「意のままに」動くようになっていくこととは、全く別物である。しかも、かつては「意のままに」動いていた意識-運動世界の崩壊という事態が生じているのであるからやっかいである。自分の運動図式では、かつての「意のままに」ほぼ自動化されていたような、歩行

や走行のような運動までもが、全くできなくなってしまうのである。かつてはできていたという身体経験を持っているからこそ、随意運動不能という事態はショックであり、本人には大きな問題なのである。

今回のアクシデントでは、最初は四肢が全く動かさなかった。動かそうと思っても動かない。意識ははっきりしているので、四肢が動かないことの驚愕と焦りは大変なものである。その後、運良く四肢が少しずつ動き始めてリハビリに入っても、この随意運動不能という事態は私を悩ませることになった。テニスでダッシュしようとしても足が出ない。サーブを打とうとしてもかつてのイメージ通りに上半身や上腕が動かない。ダッシュしようとしても脚は空回り。筋力は半減以下に低下。ゴルフのスイングもままならない(元々、ままになっていればプロになれたであろうが、、、)。すると血圧も大幅低下。筋力低下によって血管を圧迫することがないからである。血圧指標も当てにはならない。

運動機能低下は体性神経系のみならず自律神経系の不調によってももたらされる。脳からの指令による「意のまま」の運動は遠心性の神経伝達として単純化されやすいが、実は筋感覚や体性感覚による求心性の情報系による微調整が欠かせない。

今回のアクシデントで特に実感したのは平衡感覚の失調である。平衡を司るための求心性の体性感覚による微妙で繊細な平衡感覚機序は、さすがに我々にとっては精細なシステムである。

幸いにも生かされ、未だにリハビリの生活であるが、かつての身体運動図式が完全に戻ることはあるまい。そうすると今の身体で可能な運動図式を再構築するしかない。どこまでできるのだろうか。それはそれとして、実践的身体哲学の日々の学びとして一つの楽しみでもある。(しかし、このような経験はしないに限ることはいうまでもない。)

舛本 直文 (masumotonao@tmu.ac.jp)

## 体育哲学考

木村 はるみ (山梨大学)

一昨年から京都大学こころの未来研究センターで学ぶ機会に恵まれ、いろいろな研究者との出会いがあった。主に宗教学・心理学の人たちであったが、受入教員である鎌田東二教授の主催する研究会でのテーマは「身心変容技法 ―こころと体とモノをつなぐワザの総合的研究―」だった。そこでは体育関係者としては気になる話題が多かった。修行、瞑想、祈りなどの宗教体験の解明から始まり、毎月いろいろな演者が研究発表をし、2年目の今年度は気功、整体などの東洋医学ならびに音楽・演劇などの芸術系の演者も増え、毎回楽しいプレゼンテーションと活発な質疑応答がなされていた。実に面白かった。研究発表はいつものところ2年間で全19回であるが、どの研究発表も興味深くバリアーのない雰囲気私などでも参加できた。とても全部はお伝えできないが、ご興味ある方は、身心変容技法研究会のHPをご参照いただければと思う。<http://waza-sophia.la.coccan.jp/> カラダの解明は人間には永遠のテーマであり、思弁的な神の世界に比べれば、現実的で身近である。だから、いろいろな分野の人が興味をもつ。研究者であっても誰であっても、どの人もこの世界で生きてゆくためには体が必要だからである。

体育関係者の対象とするカラダと宗教関係者の対象とするカラダにはどこか同じで違う感覚が付きまとった。これは、身体(カラダ)という用語だけでなく、例えば「呼吸」「感覚」などの一般的な身体にかかわる言葉にも感じられた。こうした落差や差異を超えて同じ土俵で語れるように現象学用語などのメタ言語があるのかも知れないが、みんなが現象学者になる必要もないだろうし、世には言葉にならぬ体験があるからこそ面白いのではないか。実技

系と言われる人は、実技から実技へ、その間に言語への置き換えをするのではなく技術を習得したり伝承したりしている。客観化の必要性は現場では少ないだろう。そもそも宗教的技法であってもこの事情は同じであろうが、ここに客観的な解明の必要が出てきたのはオウム真理教の事件が契機となっていた。そこでは、まじめで優秀な若者が修行の魅力の中で犯罪者になって行くという予想外の悪が働いてしまったのである。何故か。修行の詳細の解明は先にご紹介した鎌田教授の「呪いを解く」(文春文庫)を読んでもらうと実感できると思うが、こうした若者の現実を超えたい願望とは何であるか。若者でなくても、これは現代人のひとつの憧れなのではないかと。超現実の魅力とでもいうのだろうか。あるいは自分を超える体験、現実から脱出する体験とも言えようが、特殊な意識の獲得であり、これは宗教に限らず、スポーツのゾーン体験や武道の妙技、舞台芸術の舞踊家、ピアニストの名演奏にも共通する至高の感覚であろう。いずれも日常では閉ざされた世界がそこには入り口を見せる。そこに至りたい願望とは何であるのか、優勝したいとか勝ちたいなどを超えて、ある意識の中にありたい人間の郷愁とも言える向上心の中には、経済的成長でしか成果や意味を感じられなくなってしまった近代精神への反発があるだろう。こんなことをするために生まれてきたわけではないという人間の内なる声が聞こえるようである。特に 3.11 の大震災以降の日本では、「生きる意味」「存在の価値」が復権している。

今年度の後期に初めて「スポーツ哲学」という授業を担当させていただいた。受講生は女子サッカー3人、バレー男子1人、男子サッカー2人の合計6名の体育の2年生であったが、彼らは体育・スポーツ論はさておき、「十牛図」も「山伏」も知らず、行基も空海も知らず、初めてだったが大峰修験のDVDを喜んで見ていた。心身論では輪廻転生論からダライ・ラマの映画「クン・ドン」に感動していた。最後の授業では偶然に訪問してきた剣道8段の師範の話聞き、畏敬の表情をもって素晴らしい感想を書いてきた。体育哲学には「入り口」があるのではないかと。彼らは、来年度の体育哲学の中に、祈り・瞑想・修行・畑仕事・カラオケを入れてほしいと書いてきた。さて、どうしようか……

木村 はるみ (kimura@yamanashi.ac.jp)

## 私の研究

## 「戦術的ピリオダイゼーションにおけるスポーツ実践の思想」

木庭 康樹 (広島大学)

私が、現在取り組んでいる研究は、サッカーのトレーニング理論として近年世界的に注目を浴びるようになってきている「戦術的ピリオダイゼーション *periodização tática* (以下PT と略記)」についてです。この理論は、ポルトガルのポルト大学元教授、ヴィトール・フラデ氏によって 1970 年代中頃に創案され、現在、世界で最も優秀なサッカー監督として呼び声の高いジョゼ・モウリーニョ氏 (現チェルシー監督) が採用したことで一躍有名となりました。

我が国でも、元 FC バルセロナ福岡スクールコーチの村松尚登氏 (現水戸ホーリーホックコーチ) が自らの著書で同理論を紹介しことで少しずつ知られるようになってきています [村松尚登 (2009) テクニックはあるが、サッカーが下手な日本人 日本はどうして世界で勝てないのか?。武田ランダムハウスジャパン]。PT は、これを採用しているモウリーニョ氏の、UEFA チャンピオンズリーグ優勝 2 回、欧州 3 大リーグ制覇 (イングランド、イタリア、スペイン、この間たったの 7 年) という輝かしい成績により、トレーニングメソッドとして効果的・効率的であることがすでに証明されているだけでなく、「スポーツ実践の思想」として、まさに一つの成功例を表していると言

えます。

PTの提唱者であるヴィトール・フラデー氏は、1944年生まれの現在69歳。哲学と医学の学位を持つ傍ら、FCポルトやボアビスタFCといった強豪チームの下部組織の監督を歴任し、1976年からポルト大学の教員としてスポーツ哲学（サッカーと哲学）を専攻していました。現在は、大学を退職し、プライベートで若手指導者たちのアドバイザーを担っています。

PTは、同じくポルトガル出身のモウリーニョ氏の活躍によって全世界に知られるようになるまで、およそ30年を要していますが、その考え方は、誕生当時からもポルトを中心としたポルトガル北部のサッカー界に影響を与え続け、1960年代後半から1970年代前半にかけて低迷していたFCポルトを常にリーグ優勝を争うビッグクラブへと見事に復活させています。現在では、隣国のスペインやイングランドのみならず、オランダやブラジル、ウルグアイ、アルゼンチン、コロンビア、さらには、アラブ諸国や日本でも、PTは「理論と実践を統合した〈生きた in vivo〉科学、人間行動学 praxeology」として広まりつつあります〔ジョージ・マシエル (2013) (木庭康樹訳) 戦術的ピリオダイゼーション—芸術的な科学—。ガンバ大阪講演原稿, ガンバ大阪クラブハウス, 2013年12月2日 (未刊行) (Jorge Maciel (2013) Tactical Periodization -A Science with Art...-)〕。

さて、問題は、PTの思想内容そのものについてですが、その提唱者であるフラデー氏は、これまでのところわずか2篇の論文しか執筆しておらず、それ以外は、フラデー氏へのインタビュー記事、あるいは、彼が指導した弟子たちの論文や著作等からしか、PTの思想内容を窺い知ることができません。PTについての一次資料の不足は、本研究にとってまさに死活問題であります。

しかしながら、幸いなことに、我々の研究グループでは、2度にわたるポルトガルでの現地調査の結果、そのフラデー氏の2本の論文を入手し、かれの弟子たちのサポートによってそれらの翻訳作業と思想的究明を進めています。また、二次資料とは言え、フラデー氏が弟子たちの論文や著作の内容にも直接深く関与していることも明らかとなってきました。

さらに、フラデー氏のPTは、ロシア国立体育アカデミー教授であったマトヴェーエフのピリオダイゼーション理論から着想を得ており、PTの思想背景には、スピノザの哲学、メルロ・ポンティの現象学、複雑系の科学、脳科学、サイバネティクス、プラグマティズム等、様々な学問分野が複雑に絡み合いながら存在しています〔実はマトヴェーエフについては、本領域でもすでに20年前に取り上げられている、渡辺謙 (1993) マトヴェーエフのスポーツ・トレーニング論。体育原理研究 23: 71-74〕。

そして、フラデー氏によれば、我々の研究の目的は、サッカーを科学的知識の対象と見なし、その対象の明確化と実用的適用性を証明すること、および、それらによって経験則からの脱却を目論むものであること。サッカーの「特異性 especificidade」を非線形のダイナミックなシステムと見なし、「集団スポーツゲームの一般理論 teoria geral dos jogos desportivos coletivos」のパラダイムシフトを企てること、ひいては、サッカーを社会認知モデルとして機能させることなのであります〔Frade, Vitor. (1990) Projecto para a prestação de provas de doutoramento. FCDEF-UP, Porto〕。そうしたフラデー氏による一連の構想は、要素還元論もしくは線形の科学によって語られてきた従来のスポーツ科学への挑戦であり、サッカーという社会的実践を通して現実世界を把握しようとする一つの試みであると言えるのではないのでしょうか〔以上の内容は、独立行政法人日本学術振興会から交付された平成25年度科学研究費補助金、若手研究(B)「サッカーのゲーム構造論にもとづくコーチング理論の実践的展開と映像化に関する研究」(課題番号: 24700651)による研究成果の一部である〕。

なお、この続きは、日本体育学会第65回大会体育哲学専門領域シンポジウムA「スポーツ実践の思想 実践思想のパフォーマンス」(於: 岩手大学)でお話をさせていただく予定です。

木庭 康樹 ([kiniwa@hiroshima-u.ac.jp](mailto:kiniwa@hiroshima-u.ac.jp))

## 苦野一徳（2011）『どのような教育が「よい」教育か』

講談社選書メチエ.

高橋 浩二（長崎大学）

著者の苦野一徳は、教育の「本質」を「各人の〈自由〉および社会における〈自由の相互承認〉の〈教養＝力能（りきのう）〉を通じた実質化」と結論づけている。彼によれば、〈自由〉の本質は、ヘーゲルの「諸規定性における選択・決定可能性の感度」であり、〈自由の相互承認〉とは、「互いに他者が〈自由〉な存在（自由たろうとする意志を持つ存在）であることを認めあう」（p.123）ことである。また、〈教養＝力能〉（Bildung）とは、まさに自らを自由なものへと解放してくれるものである（p.138）。

本書の問いは、「教育とは何か」、「どのようにあれば『よい』と叫ぶのか。」から発せられている。その背景について彼は、教育の問題が「常に切実な問いとして突きつけられている」と指摘し、「そうである以上、私たちは何らかの方法でこの問いを考え、そして何らかの形でこれに『答え』を出す必要がある。」（p.16）と述べている。彼の言及には、現代の教育学に対する批判及び期待がある。すなわち、絶対に「よい」「正しい」教育などはないが、教育学が「よい」「正しい」教育など決してないという主張を続けるに止まってはならない（p.16）という批判であり、「私たちはそれでもなお、『なるほど、確かに教育とはこのような営みだし、またこうした教育であれば〈よい〉といえるのではないか』と、できるだけ広く深い共通理解を得られるような教育の考え方（原理）を、提示することができるのではないか。」（p.16）という期待である。

本書において、彼は現象学とヘーゲル哲学を援用し、教育に関わる「切実な問い」を解決しようとしている。例えば、「規範」と「事実認識」という二つの観点である。この二つは別次元の問題であり、「私たちは事実認識から当為（規範）へと、議論を直接結びつけることはできない」（p.43）のである。彼は、新自由主義教育改革における問題点、例えば学校選択制の導入や株式会社学校の設置認可などを挙げ、教育の弾力化・多様化による競争の強化及びエリート育成、それに対する国民の連帯意識・道徳意識・自己責任意識の涵養について（p.46）、ゆとり教育や学校週五日制について（pp.46-47）、1989年改訂の学習指導要領における「新学力観」について（p.47）検討し、それらが持っている問題を「絶対化」と「相対化」という二項対立図式として批判している。

以上の現状を受け、彼は次のことを明らかにする必要があると述べる。すなわち、「私たちが、ある教育を「よい」とか「よくない」とか思う、その信憑や確信は、いったいなぜ、そしてどのように成立するのだろうか。つまり私たちは、なぜ、そしてどのように、教育に関するある価値観を抱くのか。」（p.70）である。それを解決するための方法や根拠が「欲望論的アプローチ」である。彼はそのアプローチを「私たちはどのような生を欲するか、その人間的欲望の本質を解明し、その上で、すべての人のそのような欲望を最も十全に達成しうる社会的・教育的条件を探究するもの」（p.78）と定式化している。なお、欲望論的アプローチのいう「欲望」は、「剥き出しの我欲それ自体を意味するのではなく、たとえば他者へと開かれたいとする欲望や、人のために尽力したいという欲望もまた、本質的に含むものなのである。」（p.82）と述べられている。

この欲望論的アプローチから、彼は「教師は自分を犠牲にしても子どもたちに尽くすべきだ」という規範や「教育は個性を必ず尊重するものでなければならない」という規範や「いじめた子どもは即刻退学にすべきだ」という規範を例に挙げ、その奥にある関心及び規範を指摘しながら、「すべての教育論は、欲望・関心相関的なのである」（p.74）と主張する。「ある教育論を絶対化するのでも相対化するのでもない、共通理解を見出すための道筋」（p.74）

が、欲望論的アプローチなのである。

冒頭に述べた教育の本質から、苫野は教育が育成獲得を保障すべき〈教養＝力能〉の本質（p.161）を、義務教育段階及び義務教育終了後の二段階において述べている。前者は、1. 重要な「諸基礎知識」、2. 「学び（探究）の方法」、3. 「相互承認の感度（ルール感覚）」、とし、それを「共通基礎教養」と位置づけた。後者は、この教養を土台としたより専門的、より探究的、そして自らにとってこそ重要な〈教養＝力能〉を「自らの教養」（pp.161-162）と位置づけている。さらに彼の考察は、実践理論にまで及び、①教育方法（授業方法、指導法）の根本的な考え方について、②「よい」教師の条件あるいは本質について、③「よい」教育行政のあり方について論を展開している。①については、「目的・状況相関的方法選択」（p.186）を挙げ、『『目的・状況相関的方法選択』の自覚とその熟練は、力量ある教師の一つの条件とあっていい。』（p.187）と述べ、②「よい」教師の条件として、信頼、忍耐、権威という三つの資質（p.198）を挙げている。③については「支援」を挙げている。その「支援」は、〈一般福祉〉を原理としている。以上の実践理論の展開は、常に本質との関係から捉えなければならない。

昨年10月から教育学部に所属し、教員養成を第一に活動し始めた私にとっては本書の問いがまさに「切実な問い」として現れた。教育とは何か。体育とは何か。学生を育てるとはどのようなことか。改めて自らの足元を見つめ直すきっかけとなる本書であった。

高橋 浩二 (takahashi@nagasaki-u.ac.jp)

## 運営委員会より

釜崎 太 (明治大学)

○日本体育学会（於：岩手大学ほか）に関する情報

- 1) 第65回日本体育学会が8月25日（月）～28日（木）の日程で岩手大学ほかにおいて開催されます。HPのURLは次の通りです。 <http://www.jspe65.sgk.iwate-u.ac.jp/>
- 2) 発表申込の締め切りは5月12日（月）（郵送の場合は当日消印有効）になっております。

○体育哲学専門領域のHPについて

HPについてお知らせいたします。現在、下記のURLにてHPを公開しております。

<http://163.43.177.95/genri/framepage5.html>

また、これに関するご意見もお寄せ下さい。

○「専門領域メーリングリストへのご登録のお願い」

メーリングリストへ登録済みの方へはメーリングリストによって会報が配信されております。速報性、経済性、「体育哲学専門領域」活性化の観点から、是非ともご登録をお願い申し上げます。次のような手順で登録できます。

- 1) グループへ参加するには、事務局 [kamasaki@meiji.ac.jp](mailto:kamasaki@meiji.ac.jp) までご一報ください。
- 2) 登録完了後、[taiikutetsugaku@yahoogroups.jp](mailto:taiikutetsugaku@yahoogroups.jp) を用いてグループメンバーにメッセージを配信することができます。

## 定例研究会のお知らせ

関根 正美 (日本体育大学)

平成25年度第3回定例研究会（大学院セッション）を2014年3月8日（土）に下記の要領で開催いたします。

なお、研究会終了後 18 時 00 分より懇親会を予定しております。会員の皆さま、ぜひともご参集ください。

- ・日 時：2014 年 3 月 8 日（土）15：00～17：30（予定）
- ・会 場：明治大学駿河台キャンパス リバティータワー・12 階 1124 教室  
JR 中央線・総武線，東京メトロ丸ノ内線／御茶ノ水駅 下車徒歩 3 分  
東京メトロ千代田線／新御茶ノ水駅 下車徒歩 5 分  
都営地下鉄三田線・新宿線，東京メトロ半蔵門線／神保町駅 下車徒歩 5 分



### 発表内容（予定）

#### 【発表①】湯浅有希子（早稲田大学大学院）楊心流柔術における当身の起源について - 密教とアーユルヴェーダとの比較

演者は楊心流柔術の当身の変遷について博士論文で言及した。今回、楊心流柔術における当身の起源を明らかにするために、楊心流柔術伝書『胴譯図』、密教図像『臨終秘訣』、アーユルヴェーダ関連文献『ススルタ本集』等を比較し、当身の起源を考察した。その結果、楊心流柔術の当身はアーユルヴェーダにおける「マルマ」と位置が類似していることが分かった。楊心流柔術の当身はインドの医学に間接的に関連していると推定される。

#### 【発表②, ③】 募集中

#### 次号予告！

次号は研究情報などの内容でお届けする予定です。投稿を下さいます方は高橋浩二（[takahashi@nagasaki-u.ac.jp](mailto:takahashi@nagasaki-u.ac.jp)）までお問い合わせ下さい。

#### 体育哲学専門領域会報第 17 巻第 4 号

発行者 日本体育学会体育哲学専門領域  
久保正秋（会長）  
編集者 小林日出至郎（広報委員長）  
発行日 平成 26 年 2 月 14 日  
連絡先 950-2181 新潟県新潟市五十嵐 2 の町 8050  
新潟大学教育学部  
025-262-7075（直通）  
アドレス：hinode@ed.niigata-u.ac.jp

#### 【編集後記】

ソチ 2014 冬のオリンピックが開催されております。人間の努力と工夫により様々な可能性が実現される身体活動です。私たちは、この人類的活動から明日に向かう多くの気付きを受け取ることが可能です。しかし、日常的無意識的活動においても大切なことがいくつも秘められております。このことを「会報」4号は意識させてくれます。また、身体教育、スポーツ実践、教育支援に関する貴重な視点も語られております。体育哲学専門領域会員の皆様のご尽力ご協力に心から感謝申し上げます。（K）